

## 巻頭写真 氷河に接する常緑広葉樹林 Evergreen broad-leaved forest beside glacier

南米大陸南部の、いわゆるパタゴニアは、南極経路で移動してきたゴンドワナ大陸に関連する植物が多く現存する地域である。特にチリ南部は、アンデス山脈南端に位置する南北の山稜を東側のアルゼンチン国境に据え、その遮蔽効果による豊かな降水が、生物多様性ホットスポットとして認知されるほどの温帯多雨林を育ててきた。南緯50度から55度にあたる南米大陸南端からフェゴ島にかけては、写真のようなナンキョクブナ (*Nothofagus*) の優占林がみられる。南米に9種あるナンキョクブナのうち、*N. antarctica*, *N. pumilio*, *N. betuloides* が様々な割合で分布するが、このうち *N. pumilio* 以外は常緑で、同緯度の北半球では想像できないような高緯度の常緑広葉樹林を目にすることになる。樹林はときに、海面まで達する氷河に接している。ナンキョクブナの進化史は、オセアニアを含めた現生種の系統解析と化石研究が進み、大枠は明らかになってきている。今後はナンキョクブナ以外の植物も含めた、より総合的かつ高精度な植生史研究が求められている。日本の植生史研究者も積極的に関わってもらいたいものである。

(西田治文 Harufumi Nishida)

文献・西田治文・2001・ゴンドワナ大陸の植物地理・日本植物分類学会会報16, 1-11・朝川毅守・瀬戸口浩彰・2001・化石記録と系統から推定される *Nothofagus* 属 (ナンキョクブナ属, *Nothofagaceae*) の進化史・日本植物分類学会会報16, 13-28.



写真1 フェゴ島最南端、アルゼンチン領の町ウスアイアから西に約100 km、ビーグル海峡に面したナンキョクブナ林。南緯55度。対岸はチリ領のナバリノ島。樹種は常緑の *Nothofagus betuloides* (手前) と落葉性の *N. pumilio* が混在。



写真2 アルゼンチンパタゴニアの世界自然遺産モレノ氷河に接するナンキョクブナ林。樹種は同上。